

# いわゆる「バーネット＝テイラー説」について

——J・バーネット『プラトン哲学』をコメントして——

村 島 義 彦

(一)

どうした巡り合わせか、書棚の片隅にひっそりと眠っていたJ・バーネット『プラトン哲学』（出隆・宮崎幸三訳、岩波文庫、一九五二年）に目がとまり、何気なく手に取ってみた。かなり前に購入したもので、あえて読みたい希望もなかったのだが、ともあれ一読してみた。目下手を染めているW・イエーガー『バイディア』での「ソクラテスの箇所」の和訳にかかわって、いわゆる「ソクラテス問題」が頭の片隅を占めていたからであろうか……。著者のバーネットについては、『初期ギリシア哲学』（Early Greek Philosophy, London, 1930）という研究書を介して、さらには「プラトン対話篇の四つの注釈書（『パイドン』（Plato's Phaedo, Oxford, 1911）『エウチュプロン』『ソクラテスの弁明』『クリトン』（Plato's Euthyphro, Apology of Socrates and Crito, Oxford, 1924）を介して、しかしながらとりわけ、あまねく古典学徒が等しくその恩恵に浴しているプラトンの代表的テキストである『プラトン全集』（Platonis Opera, Oxford University Press, 1900-1908）を介して、つとに高名は耳にしていたものの、他方、その研究書の類いを紐解く機会は、残念ながら、いまだ持てないでいた。それが今回、『プラトン哲学』（Platonism, 1928）を一読する機会に恵まれ、何よりも驚いたのは、いわゆる「バーネット＝テイラー説」の中身が、これまでイメージしていた中身と大幅に異なっていた点であった。

あえて「大幅に異なっていた」と表現したが、それはしかし、どうした事実を具体的に指しているのか——これについては、十分な説明が加えられなくてはならない。

(二)

まず、「ソクラテス問題」をめぐる「バーネット＝テイラー説」について、蛇足を承知で、およその概略を示しておこう。古典ギリシアに生きたソクラテスは、後代への尽きない影響にも拘わらず、その「人と思想」について、何がどこまで知られうるのか——この問いは、周知のように、当人が、ひたすら愛知の営みに没頭して、何ひとつ「書かれた証拠（＝自著）」を残さなかった点に由来した。ゆえに、後代のわれわれは、同時代人の手になる数少ない「ソクラテス文学」を介して当の本人に触れるほかはなく、そうした同時代人の文句のない代表に、弟子のプラトンがいた。けれども、あまたのプラトンの作品は、数少ない例外を除いて、ほとんどがソクラテスを主人公に仰いで、述べられる思想も、ほとんどがソクラテスの口を借りていたから、作品の中の教えについて、どこまでがソクラテスに属し、どこからがプラトンに属するかをできるだけ具体的に弁別するという、かなり厄介な仕事が専門研究の徒に課されることになった。

いわゆる、プラトンのソクラテスから歴史的ソクラテスを抽出するという課題をめぐっては、今日、一応の定説らしきものが確立している。すなわち、プラトンの全作品を、その執筆年代に合わせて、前期、中期、後期の三グループに類別し、前期の小対話篇群——たとえば『弁明』『クリトン』『プロタゴラス』『リュシス』『ラケス』など——にこそ、ソクラテスのありのままが、プラトンの脚色を交えずほぼ忠実に再現されている、と解釈するわけである。これに依拠するなら、ソクラテスに帰せられるのは、当人の手で「アブ」に喩えられた容赦のない吟味活動と、これに基づいた、今ある魂の惨状への容赦のない警告となるだろう。すなわち、「ただ生きるよりも善く生きる」上で不可欠な、正義、節制、勇氣、敬虔など、諸々の徳の正体を求めて、何をどこまで知っているかをひたすらに問い、ついにはアポリアに達着して、問い手も答え手も、ともに「無知の知」を分かち合うという問答の営みと、これを土台とした、これまでの人生——金銭・権力・健康など、いわゆる「魂の付属物」にのみ気を配って、肝心の「魂自体」を疎かにした——への真剣な戒めと論しを凝縮した「魂に配慮せよ」の訴え、である。

これらを超えた教えの類いはすべて、一応は、プラトンに属すると査定されている。たとえば、徳の正体を求めた定義活動の延長上におのずと位置する、対象としての「徳のアイデア」の定立と保証、さらには、あまたの付属物をまさに付属物として活用する当の魂を分析し、理知・氣概・欲望の三機能からなる複合体と結論づけるプシキケー論などは、とにも、ソクラテスの訴えを源に仰ぎながらも、それを突き抜けた、プラトン独自の発展形態と一般に解釈されている。こうしたアイデア論と靈魂(プシキケー)論が大々的に登場する中期の対話篇——たとえば『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』など——は、プラトンの思想が、ソクラテスの口を借りながら、ほぼそのままに展開されている——これが、

今日における定説なのである。

### (三)

こと「ソクラテス問題」に関するかぎり、古典分野における戦前の權威であったW・イエーガー(『バイディア』(PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen —, Walter de Gruyter, Berlin · New York, 1973))も、さらには、戦後の權威であるW・K・C・ガスリー(『ギリシア哲学史』(A History of Greek Philosophy, vol.3, Cambridge, 1969))も、ほぼ以上に同意しているし、わけても明白な典型例は、わが国の藤沢令夫(『プラトンの哲学』岩波新書、一九九八年)であるだろう。こうした現今の事情を踏まえて、それこそ無防備に、バーネットの『プラトン哲学』を紐解いたわたしは、読み進むうちに、自らの想定の独りよがりにおのずと気付かされる羽目——あるいは幸運(?)——に陥った。というのも、「バーネットIIテイラー説」としてわたしに理解されていたのは、要するに、プラトンの作品に描かれた思想を、どこまでがソクラテスで、どこからがプラトンなのかなど、とうてい基本的に区分できない。つまるところ、「ソクラテスIIプラトン」と考える以外にないのだ。だったからである。

いささか極端と思われるかもしれないが、双方の区分が基本的になしがない以上、少なくとも論理的には「ソクラテスIIプラトン」とみなさざるを得ない。これはしかし、「区分したい」という事実拘泥するが故で、プラトンの作品は、多彩な中身を満載していて、それらはしかも、前期・中期・後期で中身の傾向を異にするから、バーネットもむろん、プラトンの表現する思想のすべてが、即、そのままソクラテスのものである、などと本気で信じていたわけがない……。これが、わたしの心の声であった。

それが、どうやらそうでもないらしいぞ」と訝られてきた。バーネットにおける「ソクラテス＝プラトン」の根拠が、区分しがたいという事実への拘泥とは別のところにある、と分かってきたからである。結論を先に述べるなら、バーネットの場合、ソクラテスとプラトンが区分別でない理由は、ソクラテスによりはむしろプラトンにあった。というのも、前者が何を訴えたかについては、プラトンの作品を介して、あり余る情報を入力できるけれども、他方、後者が何を訴えたかについては、ほとんど情報を入手できないのだから——バーネットはこう主張する。これはしかし、世の通説のまさに逆であって、正直なところ、いささか理解に苦しまれる。当人の輝く経歴から推して、むしろ、たわごとが不用意に漏らされたとも思われぬ。ならばバーネットは、そもそも何を根拠に、こうした逆説（パラドクス・通説の逆）をあえて口にしたのであるか。

#### (四)

『プラトン哲学』を読み進んでいくと、バーネットの訴えんとする中身がおのずと浮かび上がってくる。かれはまず、プラトンの作品群を、今日のように前期・中期・後期に三分せず、学園アカデミアの創設をはさんで、その前と後に二分した——これによって、今日の中期作品は、すべからず前期グループに移し替えられる——。そうした上で、こう訴えるのである。プラトンは、ソクラテスの言行の忠実な記録者として輝く文筆の腕をふるい、前期作品群は、当人の「芸術の才」の見事な結晶であるが、そこにはしかし、当人の「哲学の才」はその顔を覗かせず、これを垣間見ようとすれば、学園アカデミアでの直接の教育活動に目を転じなくてはならない、と。要するに、プラトンの教え（のエッセンス）は、自らの学園内でのみ講じられて、ほとんど作品化されなかった、と

いうわけである。相手の魂に直接に語りかける言葉こそ、本当に生きた言葉というべきで、書かれた言葉など、これの影絵にすぎない（『パイドロス』二七六A）、といったプラトンの有名な眩きも、これを裏書きするかもしれない。

ところで、学園内で講じられたプラトンのレクチュアは、門外不出として世に公表されず、当の中身を知る術は今では完全に断たれていたから、われわれは、プラトンの教えについて、基本的には何も分からない、と告白するほかはない。他方、ソクラテスの教えについては、すぐれた弟子（＝プラトン）の恩恵を蒙って、今日に残る作品の形で、ほぼ完全にその内容を捉えることができた。すなわち、世に明白なのはソクラテス哲学の中身であって、プラトン哲学の中身の方は、まるで不明というわけである。これでは、バーネット＝テイラー説は、「ソクラテス問題」——ソクラテスという人物について、われわれは、何をどこまで知ることができるか——への特異な回答の一つ、というよりはむしろ、「プラトン問題」——プラトンという人物について、われわれは、何をどこまで知ることができるか——への特異な回答の一つではないのか、と皮肉りたくもなってくる。

けれども、プラトンにおける「書かれた教説」（＝作品中の思想）はすべてソクラテスに属し、「書かれざる教説」（＝学園内のレクチュア）のみがプラトンに属する、と断定して憚らないバーネットの大胆さは、そもそも何に由来するのだろうか。こう断定した当人の根拠は、果たして妥当といえるのか否か。あえてこう問うのは、他でもない、バーネット自身の古典分野での誇るべきキャリアと、ここに取り上げた『プラトン哲学』の執筆年代を考え合わせたからである。

## (五)

バーネット自身は、冒頭でも紹介したように、『初期ギリシア哲学』という大著をまとめ、『パイドン』『クリトン』など四つのプラトン注釈書も仕上げ、加えて、今日では最も普及しているプラトンの代表的なテキスト『プラトン全集 (Platonis Opera)』を校訂・編集した、古典分野ではあまりに高名な権威の一人であった。しかも、ここに取り上げた『プラトン哲学』は、そのかれが、一九二六年、カリフォルニア大学に招聘され、『サザー古典学講座』でレクチュアした中身を、一九二八年、同大学出版部から世に問うたもので、当人はしかし、同年、これを目にすることなく他界したから、あくまでも遺著と呼ばれて問題はなく、そこには、長い研鑽の果ての自らの本音が、他の作品以上におのずと披瀝されている<sup>⑤</sup>、と推測されてしかるべきだからである。

それにしても、プラトン哲学の中身を「書かれた教説」によりは「書かれざる教説」に求めるべし、と訴えるバーネットの主張を裏付ける決定的な根拠らしきものは、当の『プラトン哲学』の中に、ほとんど見当たらない。あえて挙げるとすれば、こう仮定すると、プラトンの後期作品——たとえば『パルメニデス』『テアイテトス』『ティマイオス』『法律』など——に顔を覗かせるイデア論批判（やイデア論不在）を、まったくの逆ともいえるべき、中期作品（バーネット説では前期作品）のイデア論擁立やその存在保証と、一応は無理なく折り合わせるからだろうか。というのも、後者（イデア論擁立）をソクラテスに、前者（イデア論批判）をプラトンに属させるなら、双方ともプラトンに属させた際の厄介な齟齬は、おのずと解消され、イデア論に対するプラトンの一貫性はそれなりに保証されるからである。

あるいは、アリストテレスのイデア論批判が、一般にはプラトン批判

## 四

と解されて、その妥当性が大きく問題視されているけれども、バーネットの主張に従うなら、非難の只中にあるアリストテレスを救出する道も閉ざされていないからだろうか。というのも、アリストテレスのイデア論批判が当の相手にしていたのは、プラトンの作品に登場するイデア論でなく、アカデメイアで講じられた——われわれには知る術のない——イデア論だと解釈するなら、前者とアリストテレスの批判内容を対比しながら、その的外れを指摘する目下の姿勢は、ナンセンスの誇りを免れず、アリストテレスの批判の妥当性は、この場合、批判の対象（書かれざる教説）が不可知な点を承けて、ウイともノンとも言えない——つまりは否定し去れない——からである。

## (六)

あるいは、学園運営と教育活動への本気の没頭は、おのずと、これに並行した本気の執筆活動など許そうはずもなく、そうした中でたとえ執筆されたにせよ、それは、単なる一般向けの皮相な中身にすぎず、本当の教えは、直接レクチュアの形で講じられたにちがいない<sup>⑥</sup>、といったバーネット当人の思い込みが、あまりに強く作用しすぎたからだろうか。はたまた、藤沢令夫も語るように、当時の学問界に吹き荒れていた科学主義の教条に、プラトンの形而上学的な思想内容は、根本的に相容れないところから、激しく排撃されていた窮状を見かねて、自らの研究するプラトンを何とか守り抜くべく、バーネットの手で、苦肉の一計が案じられた結果なのだろうか<sup>⑦</sup>。というのも、攻撃的にされたプラトンの形而上学的要素、すなわちイデア論や魂の不滅論などを、そっくりプラトンの手からソクラテスに移して、これらが実は、歴史的ソクラテスの唱えた中身なのだと言えたら、プラトンは、目下の科学主義の攻撃から

その身を守りうるからである。このためには、イデア論や魂の不滅論が大々的に展開される『国家』や『パイドン』などの対話篇が、歴史的ソクラテスの言行を忠実に再現したと評される初期対話篇に組み入れられなくてはならず、こうした中身を剥奪されたプラトン哲学の中身は、つまるところ、書かれた作品<sup>③</sup>にでなく、アカデメイアでの書かれざる講義<sup>④</sup>に求められる他はなかつたにちがいない。

これらはしかし、あくまでも推測の域を出ず、バーネットの訴えの根拠そのものは、残念ながら、十分に納得のいく形では提示されていない。そうしたネガティブな評価は、わたしの側での読みの浅さ、あるいは洞察不足に基づくのだろうか——この点については、専門分野を同じくする学究たちの辛口の批判を期待して止まない。

## 注

- ① J・バーネット『プラトン哲学』（出隆・宮崎幸三訳、岩波文庫、一九二五年）「第一章」一四頁。
- ② 上掲書「第一章」二五頁、「第三章」六五頁、「第八章」一四四頁。
- ③ 上掲書「第一章」一四頁。
- ④ 上掲書「第五章」八九頁。
- ⑤ 上掲書「訳者序」三〇四頁。
- ⑥ 上掲書「第四章」七四頁。
- ⑦ 藤沢令夫『プラトン哲学』（岩波新書、一九九八年）九頁。

（本学文学部教授）